

『日蔭者ジュード』における 「見えないジュード」

服 部 美 樹

序

トマス・ハーディの『日蔭者ジュード』(1895)¹は近年、ヒロインの複雑さに注目して読まれることが多く、ジュードの物語としてよりも、スーの物語として読まれる傾向にある。そしてこのような傾向の中では、『日蔭者ジュード』という作品のタイトルも、男性主人公を過度に強調し過ぎたものの²と見なされてしまう。確かに、スーの示す不可解さに較べれば、ジュードは一見わかりやすい。というのは、ジュードの苦しみがいかに悲惨なものであっても、それは理想が現実のなかで挫折していく時の苦しみであると説明すればそれで十分であるように思われるからだ。

実際この作品をジュードの物語として読む場合には、“*Bildungsromane structured around the ordeals of a young idealist*”³のひとつとして読むことが多い。ジュードのわかりやすさも、このような読み方に起因するものであろう。しかし、ジュードを理想主義者にとらえて理想と現実の対比の中だけで説明してしまうこと、つまり理想を抱きながら現実のなかで挫折していくキャラクターであると言い切ることは、ある意味で単純化と言わざるを得ない。特に問題なのは、理想主義者であることをジュードの最も重要な性質であると解釈してしまうと、彼の性的欲望は理想の実現を阻む現実のひとつとして読まれるにとどまり、それ以上論じられることがほとんどないということである。すなわち、彼が性的な感情に対して示すアンビバレントな態度や、性的欲望を持つ自分を受け入れていくことの意味が論じられないまま

になるのである。しかしこれではジュードを正当に評価したとは言い難い。

そこで本論では、ジュードを別の枠組みの中で解釈することにより、これまでは十分に論じられなかった面を明らかにしたい。具体的には、作品に繰り返し表れる「見えないジュード」というモチーフに注目し、それがジュードのどのような性質を示唆しているのかを考えてみたい。

1 理想と現実との不一致

これまでの批評では、多かれ少なかれ、ジュードを理想と現実の不一致の中で苦しむ人物と理解してきた。これは、もしハーディの意図が「人が送りたいと願う理想の人生と汚れた現実の人生の相違」⁴を描くことにあったのだとすれば、自然な読み方と言えるだろう。

しかし、理想と現実の不一致の原因が何であるのかについては、解釈が分かれる。まず、すべてはジュード自身に起因するのだと解釈する批評がある。すなわち、夢想家であるジュードは、現実を的確に見ない、限られた視野しかもたない、誤りをおかしやすい観察者であるため、必然的に覚醒や幻滅を味わうことになるのである。例えばノーマン・ページは、ジュードを錯覚と覚醒を繰り返すキャラクターと捉えているし、パトリシア・ガリバンもジュードを漸進的に幻滅していくキャラクターと論じている。⁵確かに、クライスト・ミンスターへの憧れやアラベラとの結婚に至る経緯は、このパターンに従っている。しかし、作品の中で最も重要と思われるスーとの関係は、アラベラとの関係で見られたような単純な錯覚と覚醒のパターンでは説明できない。

次に、理想と現実の不一致の原因をジュードの外に見いだす批評がある。つまりジュードの求める人生が、彼を取り巻く社会制度（例えば大学制度や結婚制度）と矛盾しているためにジュードは苦しむのだと解釈するのである。しかしこのような読み方も、小説を読んで受ける印象とは異なるものである。第一に、マイケル・ミルゲートが指摘するように、ジュードは必ずしも大学

制度に一方的に裏切られるというふうには見えない。ジュードの方から自分の野心を裏切っていくようにも読めるのである。⁶ 第二に、結婚制度も、必ずしもジュードの求める生活と矛盾し対立するわけではない。彼がスーと結婚しないのはスーが嫌がるからであって、彼が結婚という制度を疑問視しているからではない。ジュードが結婚制度を疑問視するのは、それが男女間の性的な生活を正当化する根拠として機能して、その結果、婚姻関係にないジュードとスーの性的な関係を阻む場合なのである。以下の本文で明らかにするように、ジュードにとって重要なのは、スーに対する自分の性的な感情を正当なものとして表明できるかという問題である。自由な恋愛とか、あるいは性を超越した友愛関係といった、結婚制度とは相いれない男女の関係の可能性を追求しているわけではない。

このように、理想と現実という対比の中でジュードを解釈する場合には、何を理想と見なし何を現実と見なすかによって多様な解釈ができる。⁷ しかしいずれの場合もジュードの理想主義者的な面を強調するあまり、彼の性的欲望をほとんど論じないか、または理想と矛盾する現実の一部に位置付けるだけにとどまり、ジュードにとって性的欲望の持つ意味が不当に過小評価されているように思われる。特に、理想と現実の対比を考えるあまり、スーをジュードの理想主義的な部分を具現するものとして重視しすぎることは問題が多い。確かにスーとアラベラは対照的な女性として描かれているため、普通はこの二人を精神対肉という対立におきかえがちである。そして実際ジュードも最初はそのような対立にとらわれている。しかしスーがいかにアラベラと対照的な女性であっても、ジュードの性的な衝動の対象となっている点ではアラベラと同じであることを見逃すべきではない。そこで本論では、理想と現実という対比を離れ、「見えないジュード」というモチーフを中心に作品を読むことによって、これまでの批評では不当に過小評価されていた彼の性的な感情の重要性を明らかにしたい。

2 クライストミンスターにおける「見えないジュード」

前章でも述べたように、理想と現実の対比の中でジュードを論じる場合には、観察者としてのジュードに関心が集まることが多い。なぜなら、クライストミンスターの方角に“the faint halo” (74) を見たり豚の血のしみがついた雪を“an illogical look” (65) と見たりすること、即ちジュードの視線が捉えるものが、ジュードにとっての理想や現実を示唆しているからだ。

その一方で、ジュードがいかに他人の視線に捉えられない人物として描かれているかという点はあまり論じられない。しかしこの作品には、他者がジュードを無視したり、ジュードに気づかなかったり、あるいはジュードが自分で隠れたりする場面が頻出するのである。このような「見えないジュード」というモチーフはどのようなジュード像を示しているのだろうか。以下ではこのモチーフをたどりながら、その意味を考察したい。

最初にこの「見えないジュード」というモチーフが表れるのは、ジュードがクライストミンスターに到着した日の夜の場面である。彼は一人で大学の構内に入り込むが、そこで自分が幽霊であるような気持ちを抱く。

He entered it, walked round, and penetrated to dark corners which no lamplight reached.... Knowing not a human being here Jude began to be impressed with the isolation of his own personality, as with a self-spectre, the sensation being that of one who walked, but *could not make himself seen or heard*. (79-80 省略・イタリックは筆者のもの)

これは夜の闇に覆われて文字通り「見えないジュード」であり、“could not make himself seen or heard”という表現も、彼の姿が暗闇の中で「見えない」ことを示すごく自然な表現のように思われる。しかしここで示唆される「姿を見せられない」という感覚は、実はこれ以降もジュードに付きまとう、

彼の特徴的な感覚として注目に値する。例えば、次の引用はジュードが昼間クライストミンスターで学生たちのすぐそばを歩き来している場面である。しかしここでも描かれているのはジュードの姿がいかに学生達には「見えない」ということなのである。

Every day, every hour, ... he saw them [i.e. college students], ... rubbed shoulders with them, heard their voices, marked their movements.... Yet he was as far from them as if he had been at the antipodes. Of course he was. He was a young workman in a white blouse, and with stone-dust in the creases of his clothes; and in passing him *they did not even see him or hear him*, rather saw through him as through a pane of glass at their familiars beyond. (86-87 省略・イタリックは筆者のもの)

引用中の“a young workman”という表現からも明らかなように、彼の姿が学生たちに「見えない」のは彼が大学という世界からは無視される労働者であるからだ。彼は大学への野心を持ってクライストミンスターに来たのだが、結局自分の運命が“the manual toilers”と同じ側に属すること、そしてそれは“unrecognized as part of the city at all” (119) であることを受け入れねばならないのである。このようにクライストミンスターにおける「見えないジュード」というモチーフは、大学から締め出され町の一部としても認知されない労働者のジュードを示すために使われている。そして「見えないジュード」というモチーフに付随する“could not make himself seen or heard”という感覚は、労働者であるジュードの、大学という世界に入りたくても入れないという葛藤を示していると理解できるのである。

3 スーとの関係における「見えないジュード」

前章では、「見えないジュード」というモチーフが労働者としてのジュー

ドを暗示している例を見た。しかし作品全体を見た場合には、「見えないジュード」は必ずしも労働者を暗示するわけではない。本章では、スーとの関係における「見えないジュード」がどのようなジュード像を暗示するのかを見ていくことにする。

スーとの関わりで最初に示される「見えないジュード」は、スーの写真にキスをするジュードである (86)。この時のジュードは、スーの視線の届かない所でいわば隠れてキスをする点で「見えないジュード」の一種と見なせる。しかし、もっと明確に「見えないジュード」というモチーフが示されるのはこの後である。ジュードは写真の主を一目見ようとスーの働いている店へ出かけるのだが、彼女の姿を盗み見るだけで、自分がいここであることを名乗り出ないのである。彼は自分が “as yet unready to encounter her” (89) であると感じ、スーからは気づかれない、すなわち「見えない」状態にとどまるのである。

スーの写真にキスしたときのように、スーから「見えない」状態にいることは、ジュードの白昼夢にとって都合がよく、彼の空想の中でスーの存在は憧れの対象としてどんどん大きくなっていく。従ってこのときの「見えないジュード」は、相手に悟られずに安全に白昼夢をみる恋人を暗示していると言える。しかし、「見えないジュード」が依然として、労働者として無視されるジュードを暗示する場合もある。例えばジュードが作業中、スーが偶然彼のそばに立ち止る場面がある。

She looked right into his face with liquid, untranslatable eyes, that combined, or seemed to him to combine, keenness with tenderness, and mystery with both, their expression, as well as that of her lips, taking its life from some words just spoken to a companion, and being carried on into his face quite unconsciously. *She no more observed his presence than that of the dust-motes which his manipulations raised into the sunbeams.* (90 イタリアックは

筆者のもの)

最初の文は、白昼夢をみる恋人であるジュードの喜びを示唆している。いとこであることをまだ名乗り出ていない彼は、スーに悟られずに彼女を間近に観察できるのだ。ところが、その観察によって彼は、スーが自分のことを“the dust-motes”と同じように無視していることに気づかざるをえない。このようにスーの目から「見えないジュード」は、白昼夢を見る恋人であると同時に、無視される労働者でもあり、曖昧である。

この曖昧さは、ジュードがスーに対してなかなか名乗り出ようとしないう理由にも反映されている。先に引用した“as yet unready to encounter her” (89) という表現は、きちんとした身分になるまではスーに会えないという、労働者としての気後れを示唆する。しかし上の引用に続く、“His closeness to her was so suggestive that he trembled, and turned his face away with a shy instinct to prevent her recognizing him” (90) という部分が示唆するのはむしろ恋人としての動揺である。なぜなら、ジュードはスーの近くにいることがあまりにも“suggestive” (90) で彼を震えさせるために、スーから顔をそむけ、見られないようにするからだ。このようにジュードの動機の中でも、労働者としての気後れと恋人として気後れが混在しているため、ジュードがスーに認知されない「見えないジュード」にとどまることが何を意味するのかは依然曖昧である。

しかし次の教会の場面では、恋人の気後れがより明確な形で示される。

A few minutes before the hour for service she appeared..., and at sight of her he advanced up the side opposite, and followed her into the building, more than ever glad that he had not as yet revealed himself. To see her, and to be himself unseen and unknown, was enough for him at present. (92 省略は筆者のもの)

She did not look towards him.... Being dressed up in his Sunday

suit he was inclined to follow her and reveal himself. But he was not quite ready ; and, alas, *ought he to do so with the kind of feeling that was awakening in him?*

For though it had seemed to have an ecclesiastical basis during the service, and he had persuaded himself that such was the case, *he could not altogether be blind to the real nature of the magnetism.* ...‘It can’t be! I, a man with a wife, must not know her!’ (93 省略・イタリックは筆者のもの)

引用前半は礼拝の前にスーを盗み見るジュードの喜びを示している。そして “To see her, and to be himself unseen and unknown, was enough for him at present” という表現は、ジュードが自分の姿を認知されたいという欲望を当座は（すなわち労働者であるうちは）我慢していることを示唆している。するとここでも「見えないジュード」には、労働者の気後れと白昼夢の喜びの両方を暗示する曖昧さが伴う。一方引用後半は、礼拝終了後にジュードが、スーを見る喜びを宗教的な喜びだと錯覚しようとしていた自分に気づく瞬間を示している。彼はここで、“the kind of feeling that was awakening in him” “the real nature of the magnetism” が実は教会や宗教とは関係のないものであることに気づくのだ。最後のジュードの言葉からもわかるように、ジュードがスーに抱いている関心は “unmistakably of a sexual kind” (98) であり、既にアラベラと結婚しているジュードにとっては “unexpected and unauthorized passion” (99) と言うべきものである。このように、ジュードがスーに姿を現わしたいと思いながら現わせないでいるときの葛藤には、労働者としての気後れよりも、むしろ性的な感情の自覚のほうが重要な動機として関わるようになるのである。つまり、ジュードがスーと対面することを避けているときに現れる「見えないジュード」というモチーフは、自分が性的な感情を抱いていることに気づきそれを禁じている恋人ジュードの姿を暗示するのである。

このジュードの葛藤、即ち自分の姿をスーの前に「現わしたい」気持ちと「現わしたくない」気持ちの葛藤は、衝動的に打開される。ジュードはスーが町を出ようとしていることを知るやいなや、彼女に会うことを決意するからである。こうして彼は、物理的にはついにスーの前に「姿を現わす」のである。ところが精神的には必ずしもそうではない。彼は依然としてスーに対する性的な感情を否定しており、スーの恋人としてふるまうことを自分に禁じているからだ。この意味において、ジュードは今もスーに対して姿を隠した「見えないジュード」のままであるといえる。つまり性的感情を抱いた恋人としてのジュードの姿は、スーには隠されているからだ。例えば、スーと対面したジュードは、“the bashfulness of a lover” (101) のためにぎごちないが、スーの方は “the freedom of a friend” (101) のためにのびやかである。“a lover” と “a friend” という双方の態度の食い違いは、ジュードの恋人という性質がスーには見えないままであることを象徴するものである。

このようにスーとの関係における「見えないジュード」はもっぱら自己表現を阻まれる恋人を暗示するようになる。そしてクライストミンスターにおける「見えないジュード」が暗示していた、大学から無視される労働者という意味合いは消滅していくのである。またこれまで見てきたように、恋人としての自己表現とはすなわち性的な感情の表現に他ならない。スーと直に対面する前には物理的なレベルの問題であった姿を「現わす」か「現わさないでおく」という葛藤は、スーと対面した後は、スーに対する性的な感情を現わすか隠すかという問題に還元されていくのである。

姿を現わすか現わさないでおくかという葛藤がいかにジュードを特徴づける葛藤であるかは、例えば、彼の帰郷 (Part II, Chapter 7) がスーから「隠れる」行為として描かれている点からも明らかである。普通、ジュードがクライストミンスターを去り故郷のメアリーグリーンに帰ることは、大学を断念したためであると考えやすい。確かに帰郷した後のジュードは、自分のかつての向学心を “a mundane ambition masquerading in a surplice” (133) つまり自己欺瞞に過ぎなかったと感じるようになっており、大学に対

する夢から覚醒している。だが、メアリーグリーンに彼を帰郷させた直接の原因はこのような覚醒ではなく実はスーなのである。というのは大学に絶望したジュードは、夜、酒に酔いスーの所へ行くのだが、翌朝我に返って前夜の醜態を思い出すと、スーに顔を会わせることができなくなる。そして「どこか人目につかない所へ行って、そして隠れて、そして恐らく祈ること」(126)をしなければならないと思い、その結果衝動的に帰郷するからである。ジュードが自分の向学心を自己欺瞞であったと悟る場面だけを読むなら、彼の帰郷は大学という理想に対する絶望や幻滅を具現したものに見え、ジュードは理想の側から現実の側へ覚醒したヒーローに見える。しかしハーディのエピソードのならば方は、これとは別の読み方を促すのだ。つまり、スーから隠れたいという動機が示されている以上、この帰郷という行為も、スーとの関係においてジュードに頻出する「隠れる」という行為のひとつとして読めるのである。

この「隠れるジュード」というモチーフは、他でも明確に示されている。例えば、スーへの恋心から衝動的にスーのところへ行ったジュードが、スーとフィロットソンの親密に寄り添って歩く姿を見る場面である。

...Jude saw Phillotson place his arm round the girl's waist, whereupon she gently removed it; but he replaced it; and she let it remain, looking quickly round her with an air of misgiving. She did not look absolutely behind her, and therefore did not see Jude, who sank into the hedge like one struck with a blight. There *he remained hidden* till they had reached Sue's cottage, and she had passed in, Phillotson going on to the school hard by.

‘O, he's too old for her—too old!’ cried Jude in all the terrible sickness of hopeless, handicapped love. (111-12 省略・イタリックは筆者のもの)

ジュードはスーが他の男と親密であることを見、自分が恋人として不利な立

場であることを知って文字通り姿を隠すのである。つまりスーに会いに行ったジュードの恋人としての衝動は、スーの目にとらえられることなく、文字通り隠されてしまうのである。

また「隠れるジュード」はもっと比喩的なレベルでも示される。例えば、以下の引用のジュードは、恋人としてではなく、いとことしてスーにキスしなければならないと考えているが、これも恋人としての衝動を隠す「隠れるジュード」の一例である。

She had come forward prettily ; but Jude felt that she had hardly expected him to kiss her, as he was burning to do, under other colours than those of cousinship. He could not perceive the least sign that Sue regarded him as a lover, or ever would do so....

(136-37 省略は筆者のもの)

このようにスーとの関係においてジュードは、恋人としての自分を隠さなければならない「隠れる恋人」であり続けるのである。

では、なぜ恋人であるジュードは隠れなければならないのだろうか。もちろん、アラベラとの婚姻関係が継続しているという法律上の事情も、恋人としての自己表現を阻む大きな理由ではある。しかし彼が性的衝動に対して後ろめたく否定的な気持ちを抱いていることも、彼の自己表現を阻む大きな理由となっている。確かに初期のジュードがスーに対する性的感情を“unexpected and unauthorized passion” (99) と見なすときの“unauthorized”という語は、妻以外の女性に性的感情を抱くことの不当性を意味している。だが一方、自分がアラベラと過ごした時間を“so ethereal a creature” (195) であるスーとは調和しない自分の“earthliness” (195) を示す経験であると恥じているときのジュードは、明らかに法律とは無関係な不当性を考えている。これは、ジュードの意識の中では性的な経験がアラベラという欺瞞的な人物、すなわちジュードをだましてわなにかけた人物と結びついていることによるものである。ジュードはアラベラとの経験から、

性的衝動が人を陥れるわなや欺瞞にすぎないと感じ、性的衝動を肯定的に受け入れることができなくなっているのである。つまりジュードは、婚姻関係だけでなく、性に対する考え方の面においても、アラベラの拘束を受け続けているために恋人としての自分を隠すのである。

ジュードのこの傾向は、スーの性に対する無関心さによってさらに助長される。彼女は昔学生と同棲したこと、しかし自分は決して性的な関係は持たないことを屈託なくジュードに話す。このスーの “curious unconsciousness of gender” (154) は、ジュードがスーに性的感情を持つこと、つまり彼の “the sense of her sex” (159) を無視するものであり、恋人としてのジュードの自己表現を阻むものとなっている。スーの率直な告白は、本来なら親しみを示すものだが、ジュードは残酷な仕打ちと感じている。なぜならスーが率直に語った内容は、ジュードの恋人としての自己表現を阻み、「スーから顔をそむけ」(159) させるからである。このときの顔をそむける行為も恋人としての衝動を隠す「隠れる恋人」ジュードを暗示するものである。

しかし、ジュードは遂に「恋人として」スーとキスをする。そしてこのことがきっかけで彼は自分の性的感情を肯定的に捉えはじめる。

The kiss was a turning-point in Jude's career. Back again in the cottage, and left to reflection, he saw one thing: that though his kiss of that aerial being had seemed the purest moment of his faithful life, as long as he nourished this unlicensed tenderness it was glaringly inconsistent for him to pursue the idea of becoming the soldier and servant of a religion in which sexual love was regarded as at its best a frailty, and at its worst damnation. (227)

ここでジュードは、いくらスーが “aerial” な存在でも、自分が彼女に抱いているのは宗教的崇拜ではなく性的な愛であること、またそれは自分の目標である聖職とは両立しないことを自覚し受け入れている。そして、性的な愛

を人間の弱さや墮落と見なすような宗教を職業に選ぶことはできないと決意するのである。彼は、性が人を陥れるわな、すなわち “devilish domestic gins and springes to noose and hold back those who want to progress” (228) となる可能性を否定するわけではない。しかし、自分の目標と性が矛盾することを自覚したうえで積極的に性を選択していること、またその結果、彼が “the sense of being no longer a hypocrite to himself” (229) を抱いていることは、ここがジュードの重要な転換点であることを示している。というのは、それまではアラベラの欺瞞と関連づけられていた性的感情が、自分に対する正直さと関連づけられるようになり、ジュードの正直な自己として肯定的な意味を持つようになるからである。ジュードが性的衝動に負けて挫折するという読み方、つまり性を彼の弱さで見なす読み方は、この転換点、すなわちジュードが積極的に性を選択しそれを正直な自分であると捉えていく過程を見逃しており、その点で不適当ではないだろうか。

ジュードのこのような転換にもかかわらず、スーの性に対する態度は一貫して否定的である。そのためジュードは、性的な衝動についての相反する見方の葛藤からぬけられず、性的衝動に対して一貫した呼び方をすることができない。例えば、ジュードとスーそれぞれの離婚が確定し、二人の結婚を阻む法的理由がなくなったにもかかわらずスーが結婚を嫌がる場面がある。その時ジュードは次のように言う。

“... People go on marrying because they can't resist natural forces, although many of them may know perfectly well that they are possibly buying a month's pleasure with a life's discomfort. No doubt my father and mother, and your father and mother, saw it... But then they went and married just the same, because they had ordinary passions. But you, Sue, are such a phantasmal, bodiless creature, one who—if you'll allow me to say it— has so little animal passion in you, that you can act upon reason in the

matter, when we poor unfortunate wretches of grosser substance can't." (272 省略は筆者のもの)

引用中の“natural forces” “ordinary passions” “animal passion” はどれも性的な衝動を指している。しかし、“animal passion” という呼び方は先の二つとは明らかに異なる。先の二つが性的衝動を正直な自己の姿として受け入れようとするジュードの態度を反映した表現であるのに対し、“animal passion” という呼び方は性を否定的に捉えるスーの態度を反映した表現である。つまり、ジュードが正直な自己として受け入れた性愛も、スーの前では動物的なものとさげすまれ、性的衝動を持つ人間は“poor unfortunate wretches of grosser substance” とおとしめられるのだ。スーは最終的にはジュードの性的な要求を受け入れるが、それはアラベラにジュードを渡さないための妥協である。後にスーはジュードの性的衝動を“the natural man's desire to possess the woman” (372) と弁護するが、この点からもわかるように、スーにとって性は相手を所有するための手段でしかないのだ。ジュードにとっていくら性が正直な自己の表明と結びついていても、スーの目には余計な“wickedness” (372) としてしか映らないのである。

ジュードが悲惨なのは、このようなスーの考え方を克服できないためである。実際彼は、ファーザータイムの悲劇の後、自分は“the men called seducers” (362) に属していると言うに至るが、これは彼が自分の性的な感情をもはや正直な自己表現と結びつけることができなくなっていることを示している。また、スーにすぎる時に“My two Arch Enemies you know—my weakness for womankind, and my impulse to strong liquor” (373) と言うのも、性を軽蔑し否定する、以前のジュードの態度を示している。このように、一旦は正直な自分として受け入れた性的感情を再び否定して退けると、ジュードは自分の本質を歪め、隠しているに等しいのである。⁸

以上見てきたように、スーとの関係において繰り返し描かれ重要だと思われるのは、性的な感情を隠すジュードである。「見えないジュード」という

モチーフが労働者としてのジュードを暗示する例はごく初期に限られており、大部分の場合は「隠れる恋人」すなわち性的な感情を隠すジュードを暗示しているからである。そして性的な感情を隠すことが正直な自分を隠すことにはかならないからこそ、「見えないジュード」であることは彼を苦しめるのである。

本論は、ジュードを基本的に理想主義者と見なすこれまでの批評では十分論じられなかったジュードの性的衝動の問題をとらえるため、作品内に頻出する「見えないジュード」というモチーフに注目した。このモチーフは、当初は社会の中で無視される労働者ジュードを暗示しているが、徐々にその意味合いは薄れ、スーとの関係においてはもっぱら「隠れる恋人」すなわち性的な感情を抱きながらそれを表現できない恋人ジュードを暗示するようになっていく。このようにこのモチーフは、社会的野心を阻まれるジュードと、恋人としての自己表現を阻まれるジュードのいずれをも表しうるものであり、その意味ではジュードに一貫した特徴を暗示するモチーフであると考えられる。だとすれば、このモチーフにつきまとう“could not make himself seen or heard”という、自己の姿を見せられないという感覚こそ、ジュードを特徴づける中心的な葛藤であると考えられるべきではないだろうか。そしてこのように考えるなら、ジュードの性的欲望は、彼の野心や理想同様あるいはそれ以上に、彼の自己表現に関わる重要な欲望と言えるのではないだろうか。確かに『日蔭者ジュード』は社会的に“obscure”な労働者で終わるジュードの人生を扱った小説であり、挫折した理想主義者の物語という読み方を促す。しかし、作品内で繰り返し暗示されるのは、性的な衝動を隠しづける“obscure”な恋人ジュードの姿であり、ジュードの苦しみや挫折を論じる際には、この「隠れる恋人」という姿を無視するべきではないのだ。

註

- 1) 以下作品からの引用は全て *Jude the Obscure*, ed. Patricia Ingham (Oxford

- University Press, 1985) から行ない、頁数を括弧内に示す。
- 2) 上掲書イントロダクション、xi。
 - 3) U. C. Knoepfelmacher, *Laughter & Despair: Readings in Ten Novels of the Victorian Era* (Berkeley: University of California Press, 1971) 209.
 - 4) Michael Millgate, *Thomas Hardy: His Career as a Novelist* (1971; London: Macmillan, 1994) 326 に引用されている、1895年11月10日付の Edmund Gosse 宛てのハーディの書簡による。
 - 5) Norman Page, *Thomas Hardy* (London: Routledge & Kegan Paul, 1977) 82. Patricia Gallivan, "Science and Art in *Jude the Obscure*," *The Novels of Thomas Hardy*, ed. Anne Smith (London: Vision, 1979) 126-44.
 - 6) Millgate, 328-29.
 - 7) ジュードに何らかの idealism の挫折を見出す批評には次のようなものもある。Michael E. Hassett, "Compromised Romanticism in *Jude the Obscure*," *Nineteenth-Century Fiction*, 25 (1971) 432-43 は、ロマン主義の挫折を、Elizabeth Langland, "Becoming a Man in *Jude the Obscure*," *The Sense of Sex*, ed. Margaret R. Higgonet (Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1993) 32-48 は、既存のジェンダーパラダイムの外で自己形成しようとする試みの挫折をそれぞれ見出している。
 - 8) 女と酒が自分の最大の敵である、というジュードの言葉が、ジュードの実像と矛盾する不正確な自画像であるとの指摘は、Phillip M. Weinstein, "'The Spirit Unappeased and Peregrine': *Jude the Obscure*," *Thomas Hardy's Jude the Obscure: Modern Critical Interpretations*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1987) 123, Jerome Hamilton Buckley, *Season of Youth: The Bildungsroman from Dickens to Golding* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1974) 175 でもなされている。